METROID Crisis

QWERT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＭＥＴＲＯＩＤ　Ｃｒｉｓｉｓ

【Ｎコード】
Ｎ３２８６Ｚ

【作者名】
ＱＷＥＲＴ

【あらすじ】
『ＭＥＴＲＯＩＤ　ｏｔｈｅｒ　Ｍ』から半年後の物語。
サムスは長い航海から地球連邦本国へと帰還し、ボトルシップ事変を生き延びた連邦軍時代の親友、アンソニーと再会する。彼女は彼からもたらされた、軍内部で噂される未開拓惑星の悲劇の真相を追って、新たな戦いへと身を投じていく――――。

PHASE：01（前書き）

METROID　other　M　をプレイして衝動書きです。稚拙な文章ですが、どうぞよろしくお願いします。

PHASE：01

アダムが身を呈して私たちを守ったボトルシップの一件から半年。長い航海から本国に戻っていた私のもとに、ある人物から連絡が届いた。

アンソニー・ヒッグス。

半年前、アダムと共にボトルシップの調査隊として派遣され、唯一生還した銀河連邦軍の兵士だ。私が連邦軍に在籍していた頃の同僚でもあり、あの一件以降は時折メールを交わしている。

内容は、いかにもアンソニーらしいものだった。

私はそれを快く受け入れ、帰還の翌日に銀河連邦首都のとある酒場へと出向いた。

METROID　Crisis

前回この星に戻ってきた時は過ごしやすい陽気だったのだが、今は冷たい風が吹き荒ぶ冬の入りだ。気候がある程度コントロールされてはいるが、動植物の免疫力の低下を防ぐため、季節ごとに暑寒の変化をつけている。そのため、ここに住む人々は四季を感じ取ることができるわけだ。

暑い寒いと文句を言う者もいるだろうが、ただただ過ごしやすい季節で固定されている方がいいと言う者は、極少数なのではないだろうか。
パワードスーツを装着していない今の私を見て、『サムス・アラン』という名前が浮かぶ者は、今のところアンソニーくらいのものだろう。勿論自分が女であることを隠すつもりはないし、名乗れと言われれば、迷わずその名を口にする。こうして生身の姿で髪も下ろしている時は、私の中にあるスイッチが切り替わり、バウンティーハンターのサムスとは異なるもう一人の自分を呼び出せているように思えた。地球連邦本国という安全な星だからこその感覚なのだろう。

私がとある酒場にたどり着くと、カウンターには既に大柄なアンソニーの背中があった。
扉を開けると、カランカラン、と鈴の音が鳴り、来客のサインをマスターに送る。その音で、カウンターのアンソニーは肩越しにこちらを一瞥し、その陽気な顔に笑顔を作った。

「よう、サムス。こうして会うのは半年ぶりだなぁ」

「久しぶりだな、アンソニー」
私も笑って、アンソニーの隣の席に腰掛ける。見れば、アンソニーの前にあるのは酒ではなく、氷の入ったただの水だった。

「先に飲んでいなかったのか？」

私が尋ねると、アンソニーはけらけらと笑って、
「こう見えてもレディーの扱いってヤツは心得てるつもりだぜ？先に酔ってちゃお前に失礼だろ」

「全くお前は」

私も笑いながら、まずは乾いた喉を潤すためにカウンターに置かれた冷水に口を付ける。

しばらくは、取り留めもない会話が続いた。

たわいのない話ではあるのだが、この半年の間、一人で広い宇宙を駆け回っていた私にとっては、とても価値のある話だった。
ボトルシップでの一件を受け、アンソニーは昇進して連邦軍の遊撃隊で小隊長を勤めるようになったらしい。私が別の恒星宙域に行っている間に、小さな任務がいくつかあったのだとか。
私はその話に相槌を打つことしかできなかったが、アンソニーは満足そうに話を募らせていく。少しアルコールが回り始めたのかもしれない。

「ははははっ。久しぶりに同僚に合うとついつい余計なことまで話したくなっちまうなぁ」

「構わない。私も普段はこっちの様子まで把握しきれないからな。こういう世間話は、聞いていて楽しい」

「そう言われるともっと話したくなっちまうんだが……まあ、ちょっと気になってることがあるのさ」

「ん？」
わずかなアンソニーの語調の変化を、私は聞き逃さなかった。アンソニーがマスターに目配せすると、紳士的な風貌の男性はこちらに背を向け離れた場所の来客の対応に回った。

……。

「軍の中で耳にした…というか、もう兵士の間じゃ随分噂になってるんだが…サムス、お前ＳＲ４１４って知ってるか？」

「…聞いたことはないな。その星に何かあるのか？」

人払いをした時点で、あまり公にしたくない情報なのはわかる。アンソニーはポケットから小さな端末機器を取り出すと、手の中で操作して私に手渡した。小さな、だと思っていたのだが、私の掌には収まらない程度の大きさはあった。画面に目を走らせる。

「……未開拓惑星ＳＲ４１４に大隕石落下。別に取り立てて珍しいことでもないだろう」

「そりゃそうなんだけどな。一般公開ではただそれだけのニュースで終わってるが、そいつにはまだ続きがある」

アンソニーは珍しく深刻そうな顔をして、

「ＳＲ４１４は、三年前に発見された地球型環境の惑星だ。酸素も水もあるし、俺たちが住もうと思えば充分に住めるだけの条件が整ってる。だが、未だにその星の扱いは『未開拓惑星』なんだ。基本、新たに発見された惑星にはすぐに調査隊もしくは探査機が送られるが、ＳＲ４１４に至っては探査機を衛星軌道に乗せてデータを採っただけで、星には着陸させてない。それからもう三年だ。新たな調査計画も立てられず、未だに手付かずだなんておかしいだろ？」

アンソニーの言っていることが事実なら、確かにそれは異様なことだった。

今私たちが立つ地球連邦本国は、数百億の人口を誇っている。だが、

この数は過密していると言っていい。ボトルシップのような人工の惑星環境を作り、そこに一部の人々を移住させようという計画すらある。もしも地球型の惑星が新たに発見できたなら、一秒でも早く調査を進め開拓し、余剰人口を移住させたいはずだ。
本国だけではない。
地球連邦に加盟している惑星すべてで、人口過密は起こっている。

では、何故調査を進めなかったのか。考えられるとすれば、そこに既に高度な文明を持つ先住民が居て、連邦への加盟を拒否した場合だ。裏で何かと暗躍している連邦だが、表向きは民主制に比重を置く国家。
無理矢理侵略するようなことはできないため、短期間の交渉を経ても結果が出なければ諦める可能性もある。

「確かにな。だが、ただ単に既に居た先住民に加盟を拒否されただけではないのか？」

私は頭に浮かんでいた答えを、そのままアンソニーにぶつけた。彼は頷いて、

「多分そうなんだと思う。そう仮定した上で、今回の隕石落下だ。地表を四度も焼き尽くす衝撃波が生じた。すべて仮説で固めただけだが、もし仮説通り先住民が居たとしたら、そいつらはどうなってると思う？」

「……滅びたと見るのが妥当だな。だがアンソニー、人災と天災を結びつけるのは早計過ぎるんじゃないか？」

「まぁそうだな。だから噂に過ぎないんだ。『頑固な先住民に腹を立てた誰かが、人為的に隕石を落っことした』、ってな」

言って、アンソニーはマスターを呼び寄せて三杯めに入った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

アンソニーと別れ、私は首都から少し離れた工業区画に赴いた。工場に用があるわけではない。本国に戻った時には、必ず訪れる場所があるのだ。工場と工場を仕切る塀の隙間に、五メートル四方ほどの小さな廃屋がある。もともとは作業員の喫煙所として設けられたものだが、今は別な用途で使われている。

私は入り口の扉を二回、四回とノックした。すると、扉の横にあるスピーカーから声がした。

『……サムス姉ちゃん？』

そこは私がバウンティーハンターのサムスではなく、一般人の『サムス姉ちゃん』となれる、唯一の場所だった。

ＰＨＡＳＥ：０１（後書き）

とりあえず一話。序盤はサムスの女性らしいところにも触れていきたいと思います。

サムスの容姿はｏｔｈｅｒ　Ｍのデザインで考えています。パワードスーツはプライムシリーズのバリアスーツがです。

正直ｏｔｈｅｒ　Ｍ　のサムスは綺麗にし過ぎたと思う。デザインは一番好きだけどねｗ

スマブラの時とは顔が違いすぎる…というか私服姿がハト胸過ぎたと思うのは私だけでしょうか←

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3286z/

METROID Crisis

2011年12月11日12時47分発行